

在韓日本人の言語意識¹

韓国語に対する意識を中心に

金 由那

0. はじめに

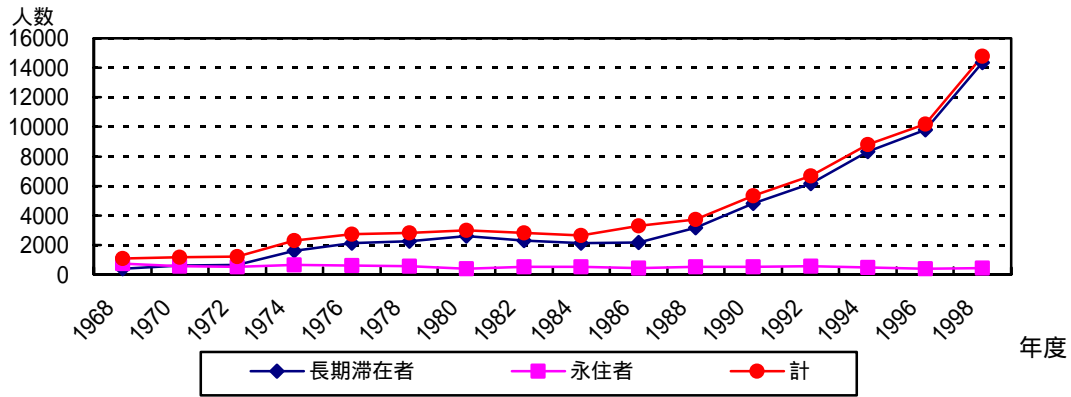
日韓の両国間の交流が進むにつれ、日本から韓国へ渡航し、長期にわたって滞在する日本人の数は、下の〈図 1〉が示すように、過去 30 年間継続して増加してきた。1998 年には長期滞在者と永住者だけでも 1 万 5 千人を超えている。本稿では彼等の中で長期滞在者と永住者を「在韓日本人」と称し、韓国語に対する意識を分析するための調査対象として、²韓国での言語生活の実態に焦点を当て、特にその言語意識について考察する。

非母国語圏内に滞在し母国語使用者と円滑な意思疎通を図るためには、その国の言語を日常生活の中で習得し使わなければならない。しかし、在韓日本人の「韓国語」に対する言語意識調査はこれまでほとんどされていないのが実状である。在韓日本人が異なった言語・文化・伝統・生活習慣の国で、いかなる言語意識を持って言語生活を営んでいるかを調査し、その実態を把握してその背景にある要因を明らかにしてみたいと思う。このような調査・分析は日韓の相互理解を深め、両国間の関係向上を図る上で意義あることと思うからである。

この論文では社会言語学的方法を援用し、在韓日本人の韓国語の習得意識、言語能力、韓国語の習得時における困難点、外国語意識、言語のイメージなどに対して計量的に考察することにする。

2 金 由那

< 図 1 > 在韓日本人数の年度別推移³



1. 調査の概要

1.1 調査の目的と意義

在韓日本人の社会的な階層、職業、年齢、性別、教育の程度などの違いによって、言語意識の様相も異なると予想される。本稿は被調査者の種々の社会的属性と関点から、韓国語に対する意識を明らかにすることを目的としている。在韓日本人が韓国語に対してどのような意識をもって言語生活を営んでいるかを明らかにすることは、彼らに対する韓国語教育にはもちろん、韓国人と日本人との円滑なコミュニケーションの向上にも役立つであろうと思われる。

1.2 調査対象と方法

言語意識調査では、自己記入式の調査票を用いて、304名の在韓日本人を対象に行った。被調査者は日本人が多く在住する首都圏を中心に、調査に協力を得やすい人を対象とする有意選択方式を取った。調査結果の分析は統計処理プログラム SPSS(Statistical Package for the Social Science)を用いて行い、属性別に分けて相関関係を調べた。被調査者の属性別分布は<表 1>に示した通りである。

<表1> 被調査者の基本属性

被調査者の属性		人数	比率(%)	被調査者の属性		人数	比率(%)
性	男性	193	63.1	最終 学歴	高校	75	24.7
	女性	111	36.9		大学	227	74.6
						2	0.7
年齢 ⁴	青年	121	39.8	職業	給料生活者	140	46.2
	中年	151	49.7		自営・経営者	8	2.6
	老年	32	10.5		主婦	58	19.1
					学生	67	22.1
						31	10.0

2. 韓国語との接触

2.1 韓国語の学習経験と学習期間

調査対象者に韓国語の学習経験があるかどうかを尋ねてみた結果、全体の76.6%(233名)が学習経験ありと答えた。「学習経験あり」の割合は<表2>のように、属性別では各々男性、老年、大卒、学生が高い。学習経験がある人に学習期間を尋ねた結果、2年以上学習したという回答が36.8%で最も多く、少なくとも6ヶ月以上学習したという回答が約75%であった。また、6ヶ月以上の学習経験を持った者の比率は学生で80.6%、主婦で48.3%というようになりに顕著な開きがある。

学習期間に比例して言語能力が高いとは断言できないが、職業別のみて学生、給与生活者、自営業、主婦の順に学習期間が長い者の比率が高いというのは、韓国での社会生活への参加度とその必要性の違いを反映していると思われる。

<表2> 属性別の韓国語との接触

性 学習	性		年齢			学歴		職業				
	男	女	青年	中年	老年	高卒	大卒	給 与 生 活 者	自 営 業	主 婦	学 生	そ の 他
学習経験あり	78.2	73.4	76.9	73.5	86.6	64.0	80.6	77.1	75.0	65.5	85.1	76.1
6ヶ月以上学習	76.1	70.3	71.4	75.8	63.2	70.6	75.3	75.7	62.5	48.3	80.6	70.3

2.2 韓国語学習の困難点

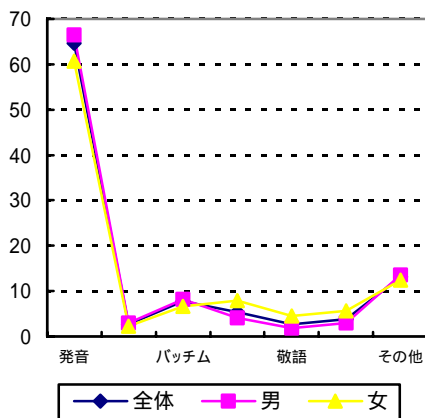
韓国語と日本語の文法構造における類似性はよく知られている。しかし外

4 金 由那

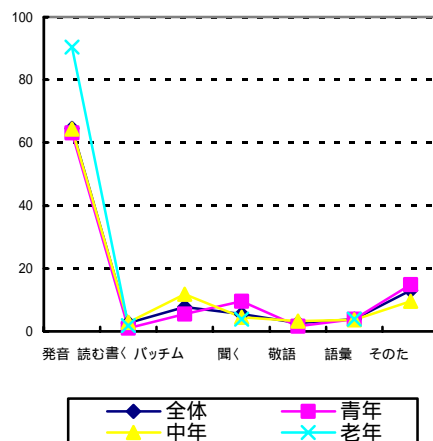
国語教育の場合、目標言語が母国語に類似している方がむしろ習得にて難しい場合がある。実際、日本人の韓国語学習を考えてみると、両言語の類似性は学習の初級段階では役に立つものの、中級以上の段階になると類似性に慣れてしまうために母音の干渉が起こりやすくなる。⁵

在韓日本人に韓国語学習時における困難点を自由記述式で回答してもらった結果、「発音」(70%)が一番高く、ついで「聞き取り」、「敬語」、「語彙」の順であった。「発音」を挙げた者の比率は<図2>から分かるように、発音の困難さを感じる比率は、男女の差はそれほど大きくないが(男性 66.5%、女性 60.7%)、<図3>のように年齢別にみると、老年、中年、青年の順に高かった。発音を習得する時、青年層は言語形成期に近いため、老年層に比べ困難を感じることは少ない。⁶ 発音が難しいという返答が一番多い理由は何であろうか。両言語の音韻構造の相違点は以下の通りである。まず韓国語には日本語と比べ、母音⁷と子音の数が多く、韓国語子音の閉鎖音と摩擦音には声帯の緊張や氣息の有無による三つの系列(平音、激音、濃音)の弁別的区分がある。また、有声化、鼻音化、流音化、激音化、濃音化など音韻規則が非常に多い。音節構造は複雑ではないが、終声(バッチム)には、ㄹ(m)、ㄴ(n)、ㅇ(ng)の区別や内破性のㅍ(p)、ㅌ(t)、ㅋ(k)の区別があり、この点が日本人には非常に難しいようである。

<図2> 韓国語学習の困難点(男女別)



<図3> 韓国語学習の困難点(年齢)

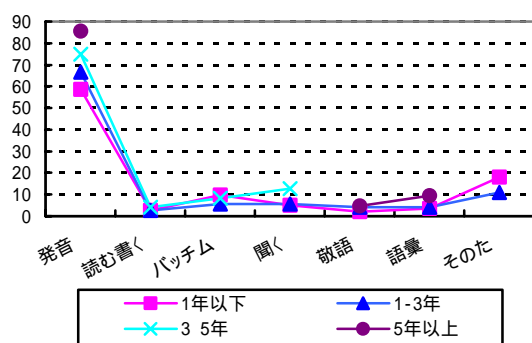


2.3 韓国語学習と居住・学習期間との相関関係

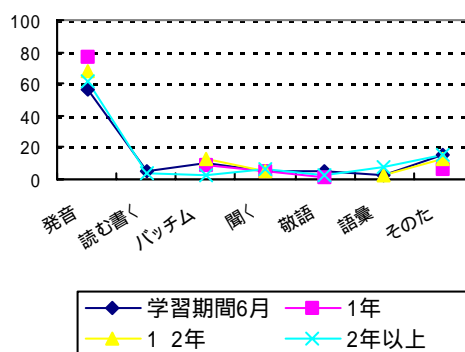
韓国での居住期間及び韓国語学習期間と学習時の難易点との間にどのよ

うな相関関係があるか調べた結果を<図4>と<図5>に示した。常識的には居住経歴が長くなるにつれ「発音」は易しくなると思われる。しかし、実際の調査結果では居住経歴が長いほど、発音が難しいという回答が多かった。1年以下(58.7%)、1-3年(66.7%)、3-5年(75.0%)、5年以上(85.7%)の順に発音が難しいと回答した者の比率が高くなっているという結果はかなり意外な感じがする。しかし学習期間と韓国語の難しさの相関関係をみると、学習期間が長くなるほど発音の難しさは解消されるようである。<図5>のように発音が難しいと答えた人の中で、学習期間が6ヶ月から1年間くらい学習した人が77.2%と最も高い。長期間学習した学習者の場合は、「発音」は61.5%で、かなり低くなっている。「その他」を具体的にみると、「表現の多様性」、「外来語の発音における日本語との違い」、「韓国語の固有語と日本語の発想の違い」、「韓国語的表現の難しさ」などがあげられる。

<図4> 学習の困難点(居住経歴別)



<図5> 学習時の困難点(学習期間別)



3. 言語能力

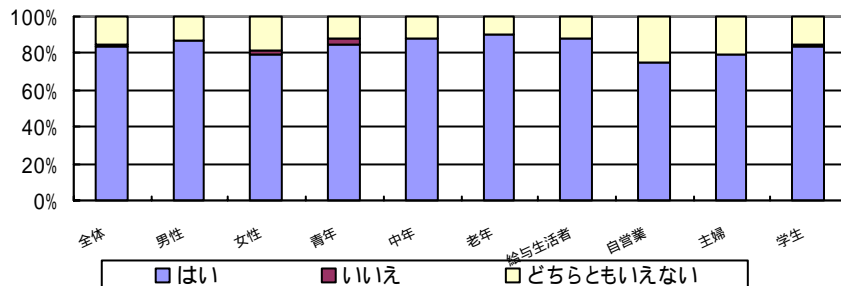
3.1 韓国語の能力

海外生活や海外研修をより円滑に効果的に導くためには滞在国の言語能力が不可欠である。この問題に関連して在韓日本人に「滞在国の言語である韓国語の能力を持つべきかどうか」と問った、これに対して、全体で84.2%の人が「持つべきだ」、14.8%が「どちらともいえない」、1%は「いいえ」と答えたことから韓国語の能力は持つべきだと考えている人の割合が相当高いということが分かる。これを男女別にみると、男性が女性よりやや高い。職業別では給与生活者、学生、主婦の順に高かった。これは2.1の学習経験と照らし合わせてみると言語能力を持つべきだという意識の高さと実際の韓国

6 金 由那

語の学習経験期間との間に相関関係があることがわかる。しかし、学習経験の場合とは異なり、言語能力を持つべきかどうかについては学習経験の場合ほど属性毎の差はない。

< 図 6 > 韓国語の能力は持つべきか



在韓日本人の実際の韓国語能力に関して、被調査者自身が韓国語の言語行動の4技能(話す、聞く、読む、書く)について、どの程度できると自己判断しているかについて尋ねた。

その結果、全体の65%以上の人々が韓国語が「できる」「よくできる」と「すこしできる」の合計)と回答した。4.1 に示したように在韓日本人で韓国語の能力を持つべきだと思っている人が84.2%であるに比べると、2割ほど低い数値である。

言語行動の4技能別に自分がある程度できると自己判断している人の比率は、読む(73.8%)、話す(65.8%)、聞く(62.3%)、書く(57.5%)の順であった。在韓日本人にとって韓国語は「読む」、「話す」、「聞く」、「書く」の順に難しく感じられていることがわかる。

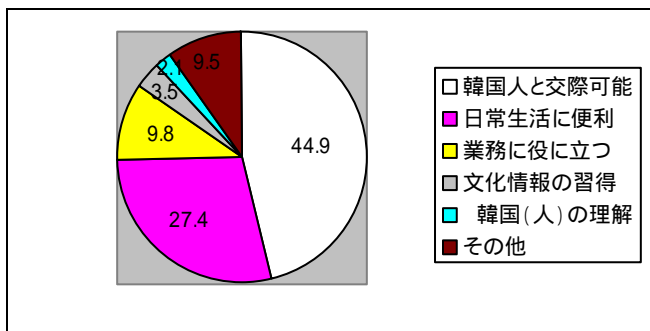
3.2 韓国語上達のための動機づけ

まず、はじめに、韓国語が流暢に話せる日本人を在韓日本人がどう評価しているか質問した結果は、「うらやましい」(79.1%)が最も高く、「当然のことだと思う」(11.6%)、「わからない」(11.0%)、「おかしい」(1.7%)、「やや気持ち悪い」(0.7%)の順であり、90%以上が肯定的な意識を持っていることがわかる。「うらやましい」の比率を職業別に見ると主婦(94.8%)が最も高く、次いで自営・経営者(85.7%)である。男女別には女性のほうが男性より10ポイントほど高い。

次に韓国語が上手に話せることがどのような面で役に立ち、有利であると考えているかを調べた。学習経験がある人に自由記入式で、「韓国語が上手に話せるとどんな利点があるか」という問いに対して、<図7>のように「韓国人との交際や意思疎通が可能になる(44.9%)」、「日常生活に便利である(27.4%)」という回答が多かった。

在韓日本人における韓国語習得の動機・目的についての以上の結果により、韓国生活で言葉が上達すると、韓国人との交際を通じて相互の友情を深め異なった思想・価値観等を理解吸収することができるし、日常生活に不便なことなく適応することができるということである。これは仕事や業務など経済的活動や公的交流などより、実生活面での便利さが高く評価されていると見ることができる。

<図7> 韓国語が上手に話せると得る利点



4. 言語意識

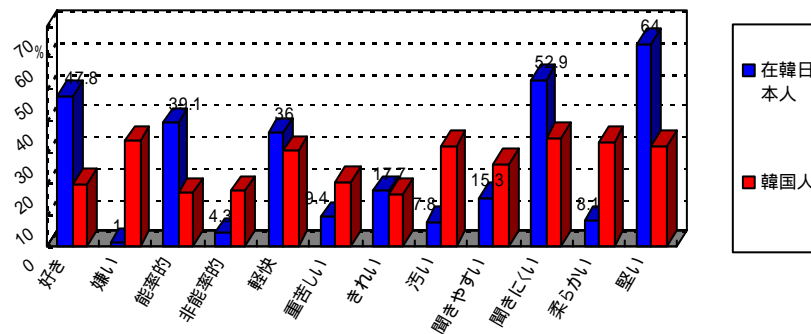
佐藤和之(1996)は「言語意識を知ることは、そのことばを支えている社会的背景を知ることであり、そのためには公的意識だけでなく、それと共にたくさんの個的意識を重ね合わせて客体化することが必要である」と述べている。⁸ 言語意識調査が必要な理由は、人々の言葉に対する意識や意見から言語使用者の意識と行動との関係を考えたり、ある意識を持つてる人は、これこれの社会的属性にあって、そういう人たちはこれこれの言語行動をとるといふことがある程度予測したりすることが可能になるからである。

4.1 韓国語のイメージ

言語意識調査でイメージ調査の方法がよく用いられるのは、ある意識や意

見、あるいは行動を支えている背景を解釈するのに役立つからである。このような、ある事柄や事象が担っている意味を確かめるために使われる心理学的手法としてSD法(Semantic Differential Method)がある。この手法は「良い - 悪い」「きれい - きたない」「明るい - 暗い」のように、対立する形容詞を用いることで、その事象がどういう意味やイメージを担っているかを明らかにする方法である。在韓日本人の韓国語に対するイメージはどのようなものであるのかを明らかにするために、SD法を用いて次のようにことばのイメージの評価によく用いられる対義語となる評定語をペアにして調査を行った。もちろん、韓国語といっても個人差、男女差、地域差などがあるので、対象は必ずしも明確ではないが、ここでは一般的に共通とされる部分のイメージを見ることにする。〈図8〉に示すように在韓日本人の韓国語に対するイメージのプラス評価は、「好き」(47.8%)、「能率的」(39.1%)、「軽快」(36.0%)の順であり、マイナス評価は、「堅い」(64.0%)、「聞きにくい」(52.9%)である。一般的にはプラスのイメージのパーセンテージがマイナスのイメージより多いが、マイナスのイメージの比率が相当高いことも注目される。

〈図8〉在韓日本人と韓国人の相対言語イメージ

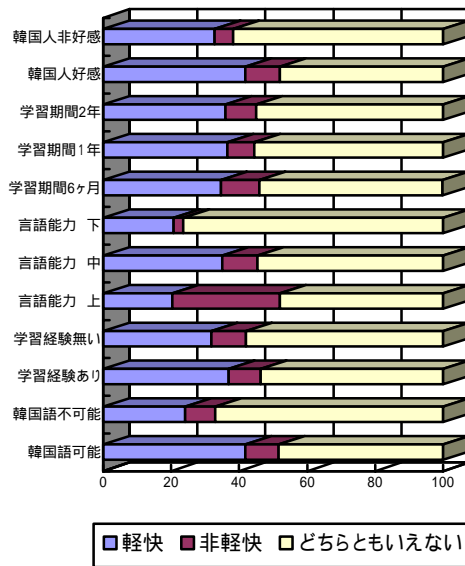


4.2 イメージの喚起度と社会言語学的要因との相関関係

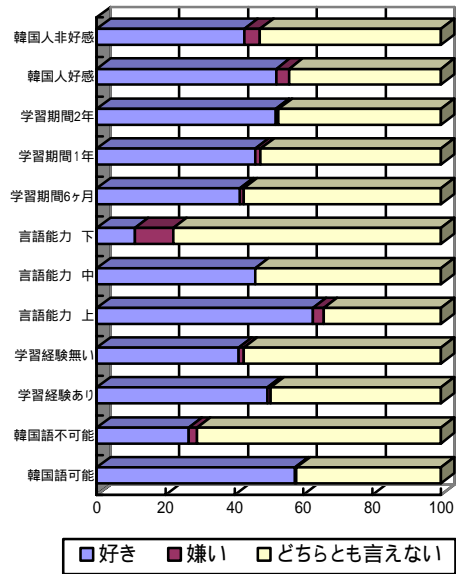
堀井令以知(1988)によれば、言語そのものから受ける感じには、言語の内在的特性とは全く違う別の条件が介入しているという。すなわち、その言語を使用する民族に対する感情、言語使用者との接触状況、風習や社会への志向、文学作品に対する憧れなどが語感を喚起する。耳にした外国語の意味が分からなくても、リズムは、その言語に対する好感度に影響を及ぼす。また言語の構造や文字の視覚的印象も同様の影響力をもつと述べている。⁹

韓国語のイメージ調査の結果を示すと<図 10> ~ <図 13>の通りである。これによれば韓国語ができる人はできない人より、韓国語に対するイメージを「軽快だ」、「好きだ」、「柔らかい」、「聞きやすい」などプラスに評価をする傾向がある。また、学習経験がある人、言語能力が全般的に「上」のグループである人、学習期間が長い人、韓国人に対して「好感」を持っている人が韓国語のイメージも肯定的な評価を下すということが分かる。在韓日本人の韓国語に対するイメージを生み出す上で社会言語学的属性が重要な要因として関与していることを強く示唆している。

<図9> 軽快・非軽快のイメージ

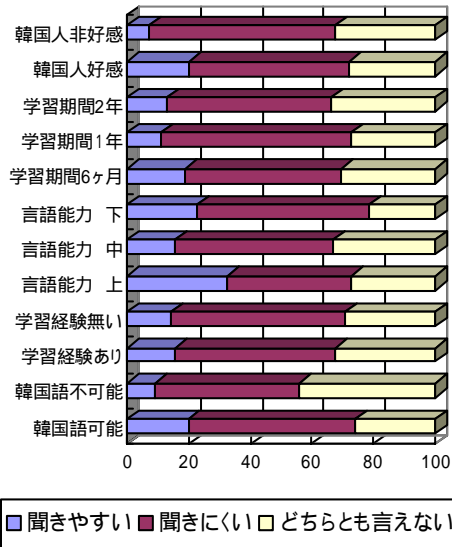


<図10> 好悪のイメージ

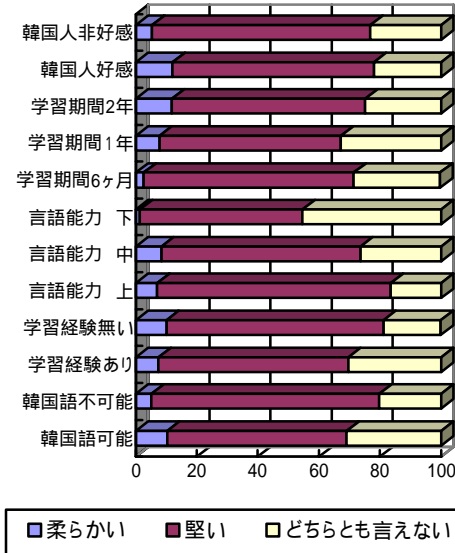


10 金 由那

<図 11> 聞きやすい・聞きにくい



<図 12> 柔らかい・堅い



4.3 外国語意識

4.3.1 韓国語が外国語として想起される順序

在韓日本人にとって韓国語は外国語としてどの辺りに位置付けられているかを調べるため、「外国語」という言葉を聞いたとき思い浮かぶ順に言語名を三つまで、記入してもらった。

その結果は<表 3>の通りであるが、これによると在韓日国人にとって韓国語は外国語として5番目に思い浮かぶ言語となっている。これと関連して、日本で国立国語研究所(1984)が日本人を対象に行った調査によると、英語(94.9%)、フランス語(74.8%)、ドイツ語(66.3%)、中国語(20.5%)、ロシア語(6.0%).....の順であり、韓国語は0.8%に過ぎなかった。¹⁰ 両調査の実施時期にかなりの開きがあるため単純に比較はできないが、予想通り在日韓国人にとって韓国語の想起順位は本国の日本人に比べてかなり高いものの、韓国に居るにもかかわらず英語はともかくフランス語、ドイツ語、中国語よりも順位が下であるということは、韓国語に対する外国語としての意識がまだ低いことを示していると解釈される。

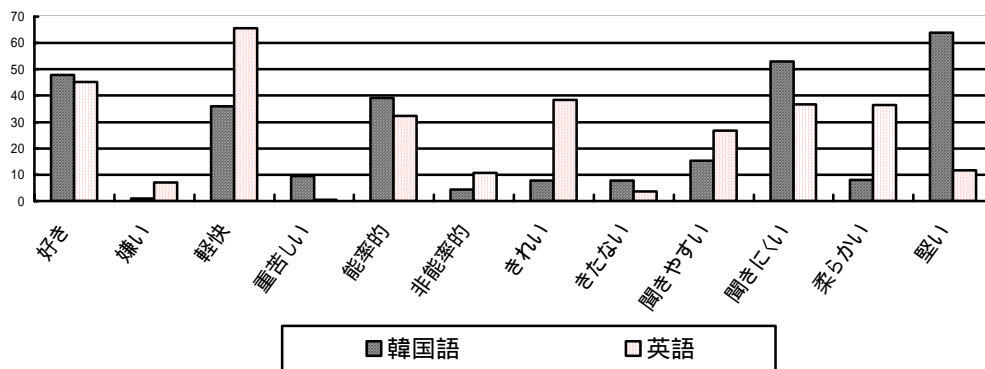
<表3> 外国語ということばを聞くと思い浮かべる言語(%)

	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	その他
第1回答	88.4	0.3	0.0	0.7	7.9	2.6
第2回答	7.0	37.8	12.0	18.1	15.7	9.4
第3回答	1.1	28.9	26.1	19.0	10.2	14.8
延べ	96.5	67.0	38.1	37.8	33.8	26.8

4.3.2 在韓日本人の韓国語と英語のイメージ比較

在韓日本人が韓国語と第一想起外国語である英語に対してどのようなイメージをもっているかを調査項目に加え、「どちらとも言えない」という回答を省いて、好きかそれとも嫌いかのようにプラスイメージとマイナスイメージの答えだけを比べた結果が<図13>である。英語に対する「軽快」、「好き」、「きれい」、「能率的」、「聞きやすい」、「柔らかい」という肯定的評価の平均は40.8%であるのに対して、韓国語に対するそれは27.7%であった。英語は全般的に肯定的な評価が韓国語より上回っている。

<図13> 韓国語のイメージと英語のイメージの比較



4.4 イメージの形成の要因

言語や国民に対するイメージはどのようにして形成されるのであろうか。本調査からは、その具体的な形成プロセスを明らかにすることはできないが、幾つかの関連変数の観点から、要因を推測することはできる。イメージの形成要因またはその媒介変数として、性、年齢、学歴、などの客観的属性(フェースシート)と、相手国に対する知識、関心、それらの情報源(相手国に

ついでの情報(テレビから得ているか、新聞からか、など)そして、相手国に対する意識(日韓関係はよい状態と考えているか、悪い状態と考えているか、対立関係かなど)などが挙げられる。

4.5 社会(言語)的要因別の韓国人イメージの相関関係

在韓日本人の言語意識を明らかにするための参考資料として在韓日本人の韓国人に対するイメージ調査して、次の3種類の因子を得られた。

第1因子[積極評価因子]; 礼儀正しい、気前がいい、勤勉、社交的

第2因子[感情的因子]; 感情的

第3因子[否定因子]; 無礼、不潔、不親切、信頼できない、粗野

これらの因子と「韓国人の親しい人がいるか、いないか」、被調査者の性格が「積極的か、消極的か」、「韓国語能力の程度(上・中・下)」などの社会的要因との相関によって相手国の人々のイメージはどう変わるかを調べた結果が<表4>である。親しい韓国人の友人を持っている人は、親しい友人がいない人より否定的なイメージ(無礼、不潔、不親切、感情的、粗野)の割り合いが低い。さらに、気軽に人に声をかける性格である積極的な人は肯定的なイメージ(礼儀正しい、気前がよい、社交的、勤勉、親切)が消極的な人より高い。また、言語能力の上下は韓国人のイメージにあまり相関関係がないということがわかった。

<表4>社会言語学的要因と韓国人イメージの相関関係(%)

韓国人イメージ		無礼	礼儀正しい	気前がよい	不潔	不親切	社交的	信頼できない	感情的	粗野	勤勉
社会言語学要因	親しい人	39.3	44.6	47.0	25.0	30.4	34.6	36.4	34.0	38.8	32.1
	有無	51.8	44.6	43.5	75.0	56.5	53.8	45.5	55.0	47.5	59.4
気軽に話をかける	はい	64.3	63.0	65.5	25.0	56.4	51.3	87.0	63.0	58.0	67.9
	いいえ	35.7	37.0	34.5	75.0	43.5	48.7	13.0	37.0	42.0	32.1
言語能力	上	16.3	8.7	66.4	6.3	10.9	10.6	1.2	10.1	12.3	6.2
	中	43.6	59.5	22.6	35.4	42.4	51.0	65.5	54.8	56.5	56.9
	下	6.5	24.7	4.6	12.5	-	9.2	-	6.6	4.9	7.9

5. おわりに

以上の分析結果をまとめると次のようである。

言語の能力について言えば、多くの在韓日本人は韓国語の習得に関心を持っている。そして、実際彼らの7割以上が韓国語学習経験者である。学習経験の率が高いのは属性別には男性、老年、大卒、学生であるという結果が得られた。また、滞在国の言語能力を持つべきだと思う人が多く、韓国語が流暢に駆使できる人を「うらやましい」と思う人が多い。しかしながら、実際、言語能力を持っている人は意外と少ない。

韓国語の学習時における困難点に関する回答を分析した結果、「発音」がむずかしいという回答が最も多かった。これは、両言語の音韻的な相違点によるものである。また、学習期間と居住経歴が長くなるにつれて「発音」が難しいと感じる人の比率が高いということは居住経歴・学習期間が長くなるにつれて他の難点は解消されていくが発音はなかなか矯正しにくいいため相対的に発音が難しいという比率が高くなるためであろう。

在韓日本人は、韓国にいるにもがかわらず韓国語を外国語として認識することが少なく、韓国語に対するイメージは「堅い」、「聞きにくい」というマイナス的に評価されている。しかしながら、言語能力が高い人は「軽快」、「好き」、「柔らかい」と肯定的な評価をする。言語能力が低い人は「重苦しい」、「堅い」、「聞きにくい」と否定的になる。韓国語に対するイメージに関しては韓国語能力が関係していて、学習経験があり、言語能力が高い人の方が肯定的な評価を下している。したがって、言語能力の高低が韓国語のイメージに大きく関与していると言えよう。

注

- ¹ 本論文は「第8回 社会言語科学会 2001.9」で口頭発表したものに加筆したものである。
- ² 旅行者と3ヶ月未満の短期滞在者は対象外にした。
- ³ 日本の外務省では毎年10月1日現在において海外に居住している日本人の実態を全在外公館を通じて調査し、『海外在留邦人数調査統計』として整理・公表している。ここにあげてあるのは1968年から1998年までの統計を論者が整理したものである。
- ⁴ 年齢は青年(10代-20代)、中年(30代-40代)、老年(50代以上)である。
- ⁵ 梨花女子大学で言語教育部に在学している日本人の学生を対象に調査したユン・イルス(1993)「日本人の韓国語教育について」『教育ハンゲル』(ハンゲル学会)第5号を参照
- ⁶ 個人の言語体系が確立される時期を言語形成期と呼び、通常5才頃から12、13

才頃がこれに当たると言われている。この時期が過ぎると、単語や語法などの若干の変化はあっても、個人の音声やアクセントの体系はほとんど変化しないと言われている。

- ⁷ 韓国語母音は8母音(ㅣ、ㅡ、ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ)であるのに対して日本語は5母音(イ、ウ、エ、オ、ア)である。両言語母音の音韻構造の相違点は発音習得に大きな影響要因になると思われる。
- ⁸ 佐藤和之(1996)「現代人の方言意識」『方言の現在』明治書院 pp18-35 参照されたい。
- ⁹ 堀井令以知(1988)「語感・言語意識・言語感覚」『日本語学』第7巻第8号、明治書院 pp4-10。
- ¹⁰ 宮島達夫(1993)「ことばの経済学」『言語』22-12 大修館書店 pp32-33。

参考文献

- 飯田秀敏(2002)「韓国語の発音に親しむために」『ことばの科学』第十五号
名古屋大学言語文化部研究会
- 江川清(1986)「言語行動の比較研究」『日本語学』5-12、明治書院
- NHK 世論調査部編(1985)『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会
- 国立国語研究所(1981)『大都市の言語生活(分析編)』国立国語研究所報告7 三省堂
- 国立国語研究所(1984)『言語生活における日独比較』国立国語研究所報告80 三省堂
- 柴田武(1977)「日本人の言語生活」『岩波講座日本語2 言語生活』岩波書店
- 佐藤和之(1996)「現代人の方言意識」『方言の現在』明治書院
- 堀井令以知(1988)「語感・言語意識・言語感覚」『日本語学』第7巻第8号 明治書院
- 宮島達夫(1993)「ことばの経済学」『言語』22-12 大修館書店
- ユン・イルス(1993)「日本人の韓国語教育について」『教育ハンゲル』第5号
ハンゲル学会
- 任栄哲(1993)『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』くろしお出版